

二松學舎 松苓會報



CONTENTS

- P2 卒業生のみなさんへ
- P3 平成25年度ホームカミングデー
- P6 教壇を去られる先生方
- P8 松苓会各支部活動報告
- P14 同期会報告
- P15 文学賞受賞
- P16 卒業生の紹介
- P17 卒業生の活躍
- P19 在学生の活動紹介
- P19 地方の大学説明会
- P20 松苓会の歩み(2)
- P23 松苓会役員、支部長名簿
- P24 「論語の授業」の紹介・寄贈図書
- P24 寄付者紹介・編集後記 他

No.50

2014年3月17日

平成25年度 卒業生のみなさんへ



二松學舎大学
学長
渡辺 和則

皆さんが社会に出た後は、先輩方が皆さんを引き立ててくださると同時に、本学の学問的伝統と社会での先輩方の活躍の実績が必ずや皆さんを励まし支えてくれることと思います。皆さんは、自信をもって大学から社会に出てください。

「壺中の天」を持ちましょう
ご卒業おめでとうございます。
きょうから皆さんは二松學舎大学の卒業生であると同時に、松苓会（二松學舎大学同窓会）の会員です。全国都道府県には松苓会支部があり、毎年定期的に支部総会が各地で開催されています。皆さんも地元の支部総会に積極的に出席してください。先輩たちと共にする一夕の話は、十年の読書に勝ります。

古語に、「忙裏山看我 閑中我看山」（忙裏、山我ヲ看ル。閑中、我山ヲ看ル。）とあります。忙時でも、閑時でも、遠くの山は見えています。しかし目先の小事にとらわれ過ぎると、遠くの山は見えません。社会に出て間もない若い頃は、我が身のことです。一杯で、周りに心をくだく余裕が

私は、一日の長ある者として、皆さんに申し上げます。皆さんの今日あるのは、皆さんの努力に負うところが多いの言うまでもないことですが、皆さんと喜びを共にし、苦勞を分かち合ってきた家族が陰になり陽になって皆さんを助けたことを忘れてはなりません。今後は、皆さんが家族を支えていくのです。それができる人になってください。

ありません。人間の器量は心の余裕から生まれます。仕事即人生という生活では心の余裕が失われます。仕事が終わってからの時間の使い方が大事です。読書でも音楽でも絵画でも、およそ私たちの心を豊かにするもの、私たち自身が心から共鳴するものにふれることで心が耕されます。少しの時間でも構いません、それを毎日続けることが大事なのです。するとやがて、その時間は、心の余裕が養われる「壺中の天」となります。「壺中の天」を持ちましょう。

皆さんはいよいよ社会に出ることになります。呉々も健康に留意し、一隅を照らす器量の大きな人物になってください。



二松學舎松苓会
会長
神津 賢一郎

二松學舎大学キャンパスの東側に風光明媚な千鳥ヶ淵があります。濠の水面に桜の花びらが舞い降り、一面に浮かび、照り映える頃、皆さんは二松學舎大学に入学され、季節巡り、学業を終えて、さくらの蕾ふくらみ、まさに咲かんとする希望の春。この佳き日に卒業式を迎えたことは感無量の喜びであると思います。雪の功なり、晴れて学士の学位を授与されました。心よりお慶び申し上げます。

さて、皆さんは二松學舎大学を卒業すると同時に、卒業生を以って組織する同窓会である松苓会の一員になります。二松學舎卒業生が松苓会の名を冠してより、本年度八十二年

になります。この間二万余の会員が全国で活躍しています。同じ建学の精神のもと、同じ窓の中で学問に勤しんだ「ともがら」であります。

二松學舎松苓会に新会員を迎え、多くの仲間が増えることは大変喜ばしいことです。心より歓迎申し上げます。松苓会の役割は会員相互の励ましと、連帯を促していく活動と共に、母校二松學舎大学の発展、充実に寄与するという重要な役割を担っております。

ところで本学創立者三島中洲師は明治の欧風化のなか、あえて漢学塾を創立したということは、よほどの気概あつたのこと。その気概を示す師の書が掛軸として残されています。

「自反而縮雖千萬人吾往矣」です。「自ら反みて縮くんば、千万人と雖も吾往かん」出典は『孟子』でよく知られている一節です。「良心に恥じるところがなければたとえ反対する者が千万人いたとしても、恐れずに向かって行こう。前途にどんな困難があっても、恐れひるむことなく堂々と自ら切り開いて行こうという気概のたとえ」。

ここに改めて取り上げたのは、本学卒業生門出に際し、はなむけの言葉として、まことにふさわしいと思ったからです。これから社会人として活躍される皆さん。どうかこの気概を持って、堂々と自ら切り開いてください。

ホームカミングデー

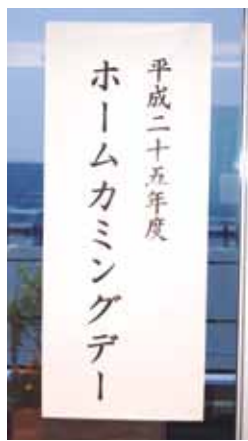
平成 25 年 11 月 2 日

平成25年11月2日(土) 14時30分から、第9回ホームカミングデー懇親会を開催。全国から約160名の参加者が集まりました。本学のホームカミングデーは、卒業生の皆さんに、在学生の活躍する姿を知って頂きたいとの思いから、一昨年度より創縁祭(大学学園祭)にあわせて実施しています。

九段1号館の13階ファカルティ・ラウンジで行った懇親会会場には、卒業後初めて大学を訪れた方もたくさんおり、近代的な大学の姿に驚いていました。神津賢一郎松苓会会長(文27回卒業)、渡辺和則学長の挨拶、野田恒雄常任理事の祝辞に続き、菅根順之名誉教授(文24回卒業)による乾杯の発声で始まった懇親会。先輩や後輩で輪になったり、名誉教授や現職の大学教職員を囲んで話し合ったりして、和やかに懇談する姿が見られ、最後に、参加者全員で校歌を斉唱して散会しました。

また、ホームカミングデーに併せ、11月2日と3日、九段1号館11階会議室を会場に開催した卒業生作品展には、書や写真などの力作35点の出品があり、多くの来場者で賑わいました。

会場には、旅館や会社を経営する卒業生の方々と多方面で活躍する卒業生の皆さんを紹介する、卒業生のパンフレットコーナーも設けました。たくさんの方に卒業生の会社や施設を利用していただきたいとの趣旨で始めたこのコーナー、来場者からはぜひ行ってみたいなどの声が寄せられました。



ホームカミングデー



ホームカミングデー



教壇を去られる先生方

長年にわたり、母校で教鞭をとられた文学部の大地武雄、酒井淳吉、林武志、吉崎一衛の四教授が、本年三月で定年を迎えられます。各教授とも在職中はゼミナールをはじめさまざまな機会をとおして学生指導に当り、指導を受けた卒業生は角界で活躍されています。長い間、母校のためご尽力を賜り有難うございました。今回、各教授に定年を迎えるにあたっての思いを、ご寄稿願ったところ次の三名の教授から玉稿を頂きましたので掲載いたします。

定年退職を迎えて



大地 武雄

昭和五七年（一九八二）柏校舎開学とともに二松學舎大学に奉職して以来、三二年の歲月はあっという間に過ぎた感があります。

この間いろいろな事がありました。が、常に学生及び大学発展の為誠心誠意取り組んで来ました。柏校舎開学とともに、漢学の二松にふさわしいクラブ活動として全国大学唯一の漢詩研究会を創設し、漢詩作、合評

会、名詩鑑賞、合宿、大学祭での発表、『二松詩文』への投稿等を実施した。この実績が基となり、今西学長の時、全国学生生徒漢詩コンクール（漢詩の甲子園）が始まった。

中沢希男、赤塚忠先生の急逝により急遽ゼミ担当と卒論指導を命ぜられた。その後教員になりたいゼミ生のために教員採用試験のための学習会を実施し、教員の夢を叶えること

が出来、ゼミ生とともに喜び合ったのもつい昨日のように思う。これが基になって教員採用試験合格講座が発足し今日に至っている。

一方、小学校に赴任した卒業生からレポートの提出、夏休み中のスクーリングの苦しみから、在学中に小学校教員の免許取得の道を切り開いてほしいとの願いから、今日玉川大学との特別協定による小学校教員免許取得の道を切り開くことが出来た。

さらに、本学が多くの教員を教育界に送り出しているところから免許更新講習開催の要望が卒業生から寄せられ、今西学長の指示のもと開催す

ることになった。また、大学院に一年修了の国語教育プログラムによる専修免許状取得の道を開拓したのも学長の卒業生の便を考えてのことであつた。

最後に、良き学生、良き教職員に恵まれて大過なく退職を迎えることに衷心より感謝申し上げます。本学の今後益々の発展を祈るばかりであります。

茨城大学教育学部卒、二松學舎大学院博士後期課程満期退学、二松學舎大学教授、大学院兼任、教育開発センター長、学務局長、二松詩文会同人、漢詩研究会顧問

定年を迎えるに当たって



林 武志

①二松學舎大学大学院文学研究科

修士課程（第一期生・文学修士）

を経て、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程満期

退学

②二松學舎大学着任年度 昭和五十二年四月一日（三十七年間）

③一年間に十幾つの委員会を勤め

ること数度に及び、最後は国文学科長二期勤めた。副学長は中途辞任である。

考えてみれば、二松學舎着任と同時に東村山に居を構え、二松學舎を去る年に再び転居したのは、偶然とはいえ感慨深いものがある。東村山の在住期間はすべて二松學舎の在任期間であつたということである。東

村山転居後早々に妻を失い、鬱症状を発症したことは思いがけないことであつた。学生諸君が陰に陽に氣にかけてくれたことも有り難いことであつた。

その後、連れあいを求めるまでに十五年を要した。ゼミ生がよく東村山の自宅へ通い詰めてくれたのもその頃のことであつた。正味五、六年

であつたろうと思うが、あの頃は鬱というこの病氣に対する理解度が薄く、口に出せないような状態であつた。

その期間も含めて、その後は二度の新カリキュラム編成に関わる仕事が続く、カリキュラム編成と同時に胃潰瘍・多発性胃潰瘍に悩む病



定年退職に当たって

吉崎 一衛

魔が待ち受けていた。その間入試業務では、一人で近代の入試問題作成業務を行っていた。

そうして、振り返ってみたら、もう定年が目の前に来ているというところが実感であった。

いつも笑いながらみていた部署の方々には言いようもないお

世話かけた。最大の未練は、やはりより良い授業を最後までできたのだろうかという思いが頻りである。お別れするに当たって、貫ける道を貫くことが最大の希望である。が見誤ったと思つたら、熟考し、直ぐ様道を換えることである。

秋に独り作者は漢土聖人の教、忠孝彝倫の道を講じ、国家有用の人物を養成する使命を体し、再三の苦境に遭逢し而も終に学舎を廃せず。偉業を今日に及ぼした。

さて、平成二十七年から、十八歳人口は減少期に入るといわれる。明治期と違った意味で、大学も困難な時代を迎えることとなる。この時にあたり、これからの皆様とともに松苓会員として協力していきたい。

明治二十五年（一八九二）三月三日、二松學舎は、創立十五周年を迎え、記念の宴を行った。この宴席で三島中洲先生は、次の詩を作っている。

海内回頭有幾鬢

海内頭を回せば 幾鬢か有る

独修聖学教諸生

独り聖学を修めて 諸生を教ゆ

匹如庭上二松樹

匹如たり 庭上 二松の樹

冒雪凌霜晚翠横

雪を冒し霜を凌いで 晩翠横はる

この詩を二松學舎専門学校の初代校長、二松學舎名誉学長であった山田準先生は次のように訳している。

海内に頭を回らして見渡せば、

漢学の学校が幾つあるであらうか。大抵は閉鎖して仕舞つた。自分は独り東洋の聖人孔孟の学問を修め学生を教授して居る。丁度我が庭に在る二本の松の木にも似て居るであらうか。松こそは冬の雪秋の霜にも耐へ凌いで、万木凋落の時、いつくまでも晩き常磐の翠を湛へて屹然として居る。自分の学校も益々頑張つて、之と同様に此の数を絶やすまじ。

また、この詩の「題意」中で山田

先生は次のように書いている。
明治十二・三年頃は寄宿生通学生を合せ、四百人以上にも達し、帝都に其の盛大を称せられて居た。然し明治二十年頃より、世は西洋學術の流入時代にて、都下の漢學塾は統統休校或は閉鎖した。此の

松苓会からのお知らせ

平成二十六年年度松苓会本部の主催する今後の行事の日程が決まりましたのでお知らせいたします。

●松苓会定期総会・幹事会

平成二十六年六月七日（土）

※総会終了後懇親会を実施する予定です。

●ホームカミングデー

平成二十六年十一月二日（日）

※卒業生作品展は例年どおり実施する予定です。作品の出品にご協力ください。

※二十六年年度の招待期は、次のとおりです。同期会等の機会としてご利用ください。

昭和40年3月（33回卒）

昭和45年3月（38回卒）

昭和50年3月（43回卒）

昭和55年3月（48回卒）

昭和60年3月（53回卒）

平成2年3月（58回卒）

平成7年3月（63回卒）

平成12年3月68回卒・政経6回卒

平成17年3月（73回卒・政経11回卒）

平成22年3月（78回卒・政経16回卒）

※二松學舎大学学園祭が十一月一日から三日で開催されます。

この機会に、在学生の活動をご覧ください。

松苓会各支部活動報告

（出席・参加者欄は敬称略）

秋田県支部

◆支部総会

支部長 三浦 基

平成25年8月31日（土）午後6時から、秋田駅前のホテルメトロポリタン秋田で開催した。

元支部長野口養吉先生、突然の訃報、緒先輩の御逝去に対し、全員で黙祷をささげた。

今年度の県支部総会案内は、「松苓会名簿 秋田県」平成24年7月20日発行版記載の191名に送付した。昨年度までは、案内送付希望調査、返信の有無等から50名程度への送付。郵送経費の負担増、参加者の減少固定、事務局の多忙等から、活動の弱体化が実態。今年度は、松苓会本部から「支部運営費」の助成を受け、全会員への送付とした。



秋田市「メトロポリタン」にて

助成金や繰越金の状況から、毎年通知したい。

出席者数を増やす手立てとしての191名全員宛発送だったが、返信ハガキ50、メール1、TEL2（計27%）。出席8名。返信無し114・宛先不明返送27。内容の改革が第一であろうが、卒業後の住所変更に対応できないものか、と。

年に一度、同窓の先輩、後輩が、過去に共有した時代と学びを語り、キャリアデザインを考え、今を互いに感じとる、そんな時を過ごしたい。例年、8月第3または第5（大曲花火は第4）土曜日開催している。

出席者 関谷都志子（大学35）・佐藤寛（大学38）・近藤和裕（大学41）三浦基（大学41）・奥山陽子（大学46）・鈴木隆博（大学54）永井しおり（大学54）・工藤正隆（大学62）

東京都支部

◆東京スカイツリーと下町散策

支部長 井上 和男

東京支部では、支部会員の親睦をより一層深めるため今年度発足した、「女子会」の企画第一弾として、「東京スカイツリーと下町散策」を平成二十五年十月六日に実施し

た。参加者は三十七名で、大学から渡辺学長も参加した。出発は第一ホテル両国から。十一時四十分集合し、開会式を行った。

東京支部女子会代表の星野副支部長の司会進行で、井上支部長、渡辺学長の挨拶の後、昼食タイム。松花堂弁当を皆でいただき、スケジュールの説明の後、下町へとくり出した。まずは江戸東京博物館へ。五階六階の常設展示室に入り、自由行動。かなりの広さに圧倒された。江戸から東京に至る様子はかなりの見ごたえであった。見学終了後、記念撮影を行い、両国国技館の横を通り両国の水上バス乗り場へ。浅草二天門まで隅田川を船で行く。約十分の船旅となった。天気はあいにく曇であったが、東京スカイツリーがどんだん近くなるにつれ、皆のテンションも上がっていった。浅草に到着後は、直接東京スカイツリーに行く者、浅草見学してからスカイツリーに向かう者とに分かれ、各々自由行動となった。浅草から東武鉄道に乗って一駅、



江戸東京博物館にて

東京スカイツリー駅に到着。東京ソラマチを通って展望台へ。開業から一年五カ月経った今も東京スカイツリーは大人気。特に休日であったため、展望台へのエレベータ乗り場には大行列が出来ていた。しかし、今回指定券が用意されていたので、数分並んだところでエレベータに乗ることができ、優越感とともに高さ四百五十メートルの展望台へと上がる。空から東京の街並みを目に焼き付けた。自由行動であったため、すぐに降りて東京ソラマチを散策する者、展望台に残って夕陽を見る者など各々楽しんでお開きとなった。

東京支部女子会は、今後も細やかな女性の目線で、皆が参加しやすいようなレクリエーションを企画していく予定である。今回好評であったため、十月の第一日曜日をイベントの日とし、恒例行事にしたいと考えている。

◆支部報発行

東京支部報第五十四号 平成二十五年六月一日発行

幅のある関係を築く 幹事長

片山聖英（五十期）

支部総会・講演会・懇親会開催案内

・青山忠一名誉教授とめぐる「浅草文学散歩」実施報告

・二松人物列伝⑬ 上田桑鳩（上）

戦後の前衛書道運動の旗手 副支部長 矢澤喜成（五十期）

・追悼 奥井基繼先生 支部長
井上和男(四十二期)

・文閣散歩に参加して 神奈川支部長 平野光治(四十期)

・私の少年時代 支部長 井上和男(四十二期)

東京支部報第五十五号 平成二十六年一月一日発行

・年頭所感 支部長 井上和男(四十二期)

・新年を寿ぐ 副支部長 佐藤理栄子(四十二期)

・東京支部総会報告 千葉・神奈川支部総会報告

・会計報告・活動報告
支部女子会発足記念第一回企画行事

「東京スカイツリーと下町散策」実施報告 高橋映子(五十三期)

女子会発足にあたり 女子会代表 星野優子

参加された皆様の声
青山先生講演会 「川柳について」五月二十五日

・二松人物列伝⑬ 上田桑鳩(下)

戦後の前衛書道運動の旗手 副支部長 矢澤喜成(五十期)

久しぶりに講演を聴いて 青山ゼミ 小松雅彦(四十九期)

・青山先生連続講演会 幹事長 片山聖英(五十期)

・郷愁の南予を訪ねて 準会員 井上綾乃

・一年を振り返って 監事 大山由美子(四十七期)

静岡県支部

◆支部総会

支部長 永井陵次

平成二十五年十月二十日(日) JR沼津駅北口のホテル「MIWA」1Fのレストランにて静岡県支部総会が持たれた。今回は七月に前支部長が急逝され、支部報発行の目前ということもあり、支部報も総会も危ぶまれたが前支部長山本氏の周到な準備のおかげで両者とも無事例年通りに行うことができた。

今回は支部会員の参加者が六名という少人数で真に寂しい限りであった。加えて大学からは学長渡辺和則先生、松苓会からは新幹事長小林公雄氏、神奈

川県支部長 平野光治氏

を来賓としてお迎えすることとな

っており、心苦しい次第でもあった。しかし、

人それぞれの情というものがあ

るから仕方

だから仕方



沼津市「ホテル MIWA」にて

の無いことである。むしろ人数の多寡によらず、駆け付けて下さる方々に感謝するべきであろう。

会は定例通り支部長から運営上の問題点、会計報告などが提案され、承認された後、学長からキャンパス

の九段統合事業の進捗状況、それに伴う四号館建設計画のお話と続き、

そのまま懇親会となった。始めはもの寂しい雰囲気ではあったが、少人数がかえって幸じたのか、学生時代の思出話、昨今の学生気質など、談

論風発、真に楽しい会が盛り上がった。神奈川の平野支部長からは「静岡の会は形式にとらわれない所がいい」とお言葉を頂いたが、少しは反省もしなければとも感じた。

いづれにせよ、今年も意義ある集いとされたのは、御来賓のお三方のあたたかい心遣いのおかげだと思

う。感謝の念に耐えない。

来年は県西部地区での開催となるが、一人でも多くの会員に参加していただき、二松學舎出身の幸福感を味って欲しい。

参加者

来賓

学長 渡辺和則

幹事長 小林公雄

神奈川県支部長 平野光治

支部会員

神津賢一郎(27期) 中村且之助(34期) 吉野恵津子(37期)

江本浩二(51期) 外山博世(51期)

永井陵次(38期)

◆支部報発行

静岡県支部報 平成元年創刊 平成二十五年九月二十日発行

・支部長 故 山本昇平先生を悼む 永井陵次

・平成二十四年度静岡県支部総会 支部長 山本昇平

・平成二十四年度返信ハガキの近況便りから

・平成二十四年度 支部会費納入者

・平成二十五年度総会・懇親会案内 他

宮城県支部

◆支部総会

支部長 千葉 仁

期日 十一月三十日 17時～20時
場所 街道青葉(仙台市)

参加者 5名
(本部・大学からの御臨席はご遠慮)

資料 ①支部会員名簿 ②大学新聞

③『学』(20部)、その他多数

一 挨拶・総会等は例年通りに簡単に終了。

二 母校の発展状況の概要説明、入学生として送り出すに相応しいことを話し合う。

三 支部会員の動向・活動状況を話し合う。

①東北楽天イーグルスの優勝の意味 発足当初は「これでもプロか」と響きを買ったチームが苦節九年での「巨人」を破って優勝。イ

ーグルは藩主政宗の鷹狩の伝統の名を負う。粒粒辛苦の見事な覇権、震災復興への祈りとダブった東北人らしい勝ちパターンを称賛。わが支部活動もあやかりたい。

②エコノミック世相と文学

ケータイ・スマートフォンに目が奪われ、活字・文学・古典が軽遠され、若者の「○○活」等はすべて「エコノミック」が原理。文学・文学部の現代的な意義は何か。松苓会は単に大学の同窓という縁だけならば先細りは当然である。文学は「愛読・教育・研究・創作」の分野に限定され、エコノミックとは迂遠な分野。限られた分野で有効な活動を構築することは至難の業である。そんな中で宮城県支部会員の活動の一端を紹介しよう。

③活躍の一端の紹介

教育現場の第一線で国語教師として頑張っている。現代文・作文・古文・漢文の国語の全領域の指導に強くて好評を得ている。また大学・高校等で研究者として活動している会員は多忙を極めている。犬飼公之(34回)の講演活動、また五十嵐伸治(44回)『東北文学辞典』勉強社の執筆分担。執筆のために東北各地の文学を踏査して新たな発見が多かったという報告。阿部和夫(34回)の「『百物語』をめぐる人々」は、作者森鷗外から斉藤茂吉・小泉八雲・坪内逍

北海道支部

◆道東分会総会

遙、そして恩師の飯塚友一郎教授に及ぶエピソードとして興味ある話題。創作活動として、書道分野での活動も目覚ましく、県高校書道研究会事務局長の栗山仁司(55回)を中心に田代ひとみ(44回)・佐々木なつき(74回)等の会員が各種書道展で活躍。また漢詩創作に千葉仁(27回)が各種の漢詩誌に投稿している。

参加者 犬飼公之・阿部和夫・五十嵐伸治・島倉尚子(66回)・千葉仁

平成25年度道東分会総会は、10月12日(土)釧路市栄町溶岩焼「こじやれ」にて開催されました。

当日釧路では、国際ロータリークラブの大会が開催されており、市内のホテルは全て満室で、1ヶ月前から予約するべくホテルを探



釧路市「こじやれ」にて

◆道南分会総会

平成25年度道南分会総会は、10月26日(土)函館市本町活魚料理「いか清」にて開催されました。

今回は、前回会長の南部さんが7月に倒れリハビリ中とのことで



函館市「いか清」にて

◆道北分会総会

参加されず少しさびしい会とはなりましたが、いつもどおり、やかましい函館弁の応酬で楽しい会となりました。二次会は、松風町のスナックでカラオケ大会と、「楽天」祝勝会(仙台出身者2名)となりました。

〔道南分会参加者〕
吉川真理絵(60期 分会幹事) 吉川肇(59期 分会幹事) 荒井到(51期) 開原正信(39期) 田島基義(38期 分会長) 増井義昭(39期 支部長) 山崎郁紀(36期 事務局長)

約10年ぶりに旭川市5・7小路ふらりと「てんゆう」にて、11月9日(土)初雪の降る寒い日、道北分会総会が開催されました。

当日は悪天候で猛吹雪も心配される中、稚内から特急列車で2時間半かけて2名も参加してくれました。

旭川は北海道第2の都市だけあって人通りも多く、他都市のようなさびれた様子はうか



旭川市「てんゆう」にて

がわれず、日本海やオホーツクの海の幸、上川の山の幸に恵まれ、物価も安く（因みに一番参加費が安かった）住みやすいところのようだ。久しぶりであり、当日始めて支部の会合に出席する人もあって、学生時代のことや各自の近況など二次会まで話は尽きませんでした。

〔道北分会参加者〕

佐々木伸（74期 稚内）

松林豪（59期旭川 分会幹事）

工藤昌彦（56期 旭川）

増子優二（56期 稚内）

吉野泰正（55期 滝川）

湊 邦夫（43期 旭川）

増井義昭（39期 札幌 支部長）

山崎郁紀（36期 札幌 事務局長）

◆平成26年新年会

事務局長 山崎 郁紀

昨年の正月よりは少雪の1月9日

（木）、札幌

ラマダホテル

「紅燈籠」

で開催され

ました。

昨年は、

新年会、支

部総会、道

東分会（釧

路）、道南分

会（函館）

そして久し

ぶりに道北

分会（旭川）



札幌市「ラマダホテル」にて

でも支部の会合が行われました。

それぞれの会合毎の参加人数はそれ程多くなくとも、年に5回も場所を変えて実施されていけば相当数の参加人数になり、広大な北海道で同窓会活動としては今後もこの形で継続してゆきたいものです。

それにしても、74期以降の卒業生で北海道で生活をしている者の情報が全くといっていい程ないので、卒業式同志情報を得るようそれぞれ努力することを今年度の課題とすることにしました。

参加者（8名）

永田哲之（65期 伊達市）

富永貴之（65期 千歳市）

若松顕仁（56期 千歳市）

吉野泰正（55期 滝川市）

花木弘（49期 松前町）

不動和則（43期 恵庭市）

増井義昭（39期 札幌市）

山崎郁紀（36期 札幌市）

◆支部報発行

北海道支部会報 第四十七号 平成二十五年七月二十三日発行

支部会員の異動 平成二十五年

新年会報告

平成二十五年年度北海道支部「総会」のおしらせ 大学トピック

北海道支部会報 第四十八号 平成二十五年十二月十日発行

北海道支部総会 開催しました

道東分会開催しました

道東分会開催しました

道東分会開催しました

道東分会開催しました

道東分会開催しました

神奈川県支部

◆新年賀詞交歓会

支部長

平野光治

平成26年1月12日（日）藤沢のき

じま赤門にて、平成26年松苓会神奈

川県支部賀詞交歓会が開催されま

した。松苓会本部常任幹事 助川忠

弘様、二松學舎大学副学長 山崎正

伸様、東京支部長 井上和男様、東

京支部顧問 木村正雄様をお迎えし、

支部会員6名を含め、10名の参加と

なりました。支部長挨拶後、助川忠

弘様、山崎正伸様、井上和男様より、

ご挨拶をいただきました。乾杯後

の懇談の中

で、木村正

雄様より、

ご挨拶をい

ただき、会

員の皆様か

ら近況報告

があり、和

やかな雰囲気

が流れて

おりまし

た。例年に

比べ少人数

ではありま

したが、大



藤沢市「きじま赤門」にて

◆支部報発行

神奈川県支部報 第三十三号 平成二十五年十月二十五日発行

第三十六回支部定期総会報告

平成二十五年年度賀詞交歓会報告

文学歴史探訪「鎌倉」（源頼朝

ゆかりの道）

歌手・水木昌平の新曲を手かけ

て 三十九回卒 保田陽子

会員の近況 支部役員紹介

「神奈川文学散歩」発行 支部

会員八名のコラム紹介

平成二十四年度決算報告 平成

二十五年度予算報告

群馬県支部

◆支部総会

支部長 新井喜義

松苓会群馬県支部の平成二十六年

度総会・新年会が、一月二十五日の土曜日に伊勢崎市の「プリオパレス」で開催されました。今回の出席者は、会員十五名、招待者二名、計十七名でした。

午後四時から始まった総会では、支部長挨拶に始まり、来賓の神津賢一郎会長がご挨拶の中で、先生が長野県佐久のご出身で、下仁田にある「神津牧場」との関わりや学生時代、帰郷の際、群馬をぬけて碓氷峠をアプト式機関車に揺られ故郷の駅舎に降りた話など、我々群馬県人としては大変興味あるお話を聞かせていただきました。（ちなみに、アプト式機関車が碓氷峠から消えて四十年経ちます。）

また、総会の中の事業報告では、第二回を終えた「書展」について、今回も大勢の皆さんに鑑賞していただき好評であった旨

の報告があり、今後も続けていくことが確認されました。

総会後に行われた講演では、茨城県出身の岡野康幸氏（現在、群馬医療福祉



伊勢崎市「プリオパレス」にて

大学助教）が「中国で活躍した二松學舎の先人たち」と題してお話してくださいましたが、その中で、特に橋川時雄先生の中国での活躍と交流についての話題は面白く拝聴しました。

その後の新年会の席上では、出席者の近況報告が行われましたが、会員の皆さんがそれぞれの立場で活躍されていることを伺い二松學舎の力を感しました。

ただ、残念なのは、若い人たちの出席がないということです。今回も二十代、三十代の出席者は一人でした。また、国際政治経済学部卒業生の出席者に関しては、ここ数年おりません。このあたりの問題は、他支部でもかかえているのではないかと思います。

ともあれ、平成二十六年も明けました。当支部も、会員相互の親睦を図りながら前進したいと思っております。

出席者

中里昌之（36回） 新井喜義（37回）
小保方康行（38回） 金井 俊（38回）
塚本忠男（40回） 須田章七郎（40回）
高橋慶一（46回） 都丸弥生（47回）
小石さち子（47回） 高柳 薫（47回）
松本茂治（49回） 金澤正教（50回）
金田仁志（53回） 宮森庸子（56回）
西牧秀敏（62回） 岡野康幸（茨城県）
神津賢一郎（本部長）

近畿連絡協議会

◆恒例の新年互礼会（総会）を開催

事務局長 斎藤 衛

平成26年2月22日（土）、前段に支部長会議を行い、午後3時10分に大阪千日前、鳥よし本店にて開会。数えて66回めの互礼会となる。11名の参会、来賓として、渡辺和則学長、小林公雄本部幹事長を迎え、三重から伊藤淑子（38）小林直紀（44）、兵庫から武内昭徳（47）奈良から末吉榮三（12）辻一（39）大阪から西田清（35）、浦壁健三（44）斎藤衛（49）そうして、元、奈良に所属され、今、千葉に在る山田勝久（34）の諸兄弟、開宴に先立ち、今回の連絡で承った物故された方々への黙祷を奉げる。（大阪）土井良之、坂本昭仁（兵庫）木曾義孝、

松本博、（奈良）平田勝通、（三重）山口良民の6名のご冥福を祈る。

総合同会

を斎藤衛が

担当。開会

の挨拶に立

った末吉代

表は馬年に

ちなむ「快

馬は鞭影を



大阪市「鳥よし」にて

見るや正路につく」を引用して母校の創立137年、松苓会本部の83年、そうして、松苓会近畿の66年の節目に、このことにつけ、おりにふれて、この言葉の要諦から目をそらさずに、ここに燦然たる歴史が築かれてきた。この母校愛に母校二松學舎の明日がある、と結ぶ。渡辺学長から大学の近況、ことに、学舎・教育施設の九段への集約計画の進展、近くは靖国通りに4号館の建設着工と、それに呼応した学術研究の深化充実をはかっている。小林幹事長は若いころの松苓近畿との浅からぬ縁の話にはじまり、本部創設85年の記念事業は中味の濃い企画にと立案し、その成果に、総力を挙げている。また、二松學舎は明治以来、全国区の漢学塾、大学であるが、世情が地方からの志願が減少の傾向にあり、この課題に対しても思索をめぐらしている。近畿圏の多大の後援を望みたいと述べられて、乾杯の音頭をいただく。お一人おひとりの近況はどの方も二松學舎で学問を修めたお蔭が今の自分であるとの異口同音には天晴れな気持ちを抱いた。結びは近畿代表幹事の武内昭徳氏の言葉で午後6時10分に有終を飾る。

埼玉県支部

◆支部総会

支部長 町田 哲夫

平成二十六年二月二十三日（日）、

十二時三十分より、ラフレさいたま秋ヶ瀬庵（さいたま市新都心）において、平成二十五年度埼玉県支部総会・懇親会を開催しました。総会には、大学より渡辺和則学長、松苓会本部より神津賢一郎会長、東京都支部より星野優子副支部長のご臨席をいただきました。県内会員の参加者は十五名でした。関東地方は開催日の一週間前大雪に見舞われ、交通機関は大混乱が起きましたが、当日は穏やかな天候に恵まれ、学生時代の話題を中心に楽しい時を過ごすことができました。

総会では、今後の支部総会の開催についての方向を示し、参加者の合意が得られました。具体的には次年度の開催は秩父市、観光や文化財めぐり等を含めた企画を立案し、参加者の交流を深めることになりました。以後、県内各地の史跡・文化財めぐりや大学の協力を得て講演会活動等、事業性を重視した支部活動を展開することが確認されました。

回を重ねるごとに増加している



さいたま市「秋ヶ瀬庵」にて

参加者数ですが、若い世代の加入増を含めて、個々の会員が情報提供に努め、今まで通り、人と人とのつながりから拡充を図ることになりました。

また、大学の四号館の建設に併せて、支部として母校への寄付を行うことが満場一致で決まりました。

懇親会では、参加者一人ひとりが近況を報告し、終始和やかな雰囲気の中で会を進めることができました。中でも、79回卒の駒井伸彦さんが埼玉県の教員採用試験に合格し、この四月から本採用教員としてスタートするという報告には、参加者から大きな声援が寄せられました。

総会参加者は次の通りです。

来賓

渡辺和則（二松學舎大学学長）

神津賢一郎（二松學舎松苓会会長）

星野優子（松苓会東京都支部副支部長）

支部会員

浅井昭治（18回） 木村誠次（39回）

持田賢一（40回） 佐藤 修（41回）

福嶋辰美（42回） 本田和成（42回）

町田哲夫（42回） 町田芳子（42回）

八木直也（42回） 柴田京子（45回）

青木一弥（47回） 吉野昇之助（47回）

小西明德（60回） 中山大輔（71回）

駒井伸彦（79回）

福岡県支部

◆支部会

支部長 永淵 道彦

一月二六日（日）、平成二五年度の支部会（新年会）を筑紫野市二日市中央三丁目（二日市中央商店街）の福岡二日市文学館で行ないました。二日市文学館は太宰府天満宮の玄關というべきJR二日市駅より徒歩5分、西鉄二日市駅から同七分の至便の場所ですが、日取りも悪く、久しぶりの支部会であったことから、少人数の出席でした。当初、七人の希望が、急病者などあり、以下の四名の出席となりました。

「松苓会福岡」第十二号 平成二十五年六月一日発行
・追悼・仙田美智子先生 支部長 永淵道彦
・福岡県支部の拠点として 二日市文学館を設立します 支部長 永淵道彦
・書物紹介

岩手県支部

◆支部報発行

岩手県支部便り第五十二号 平成二十五年六月二十三日発行

・最期の持てなし 支部長 宮本義孝

岩手県支部便り第五十三号 平成二十五年八月一日発行

・総会・懇親会を終えて 支部長 宮本義孝

岩手県支部便り第五十四号 平成二十六年二月八日発行

・一枚の葉書 支部長 宮本義孝
覆刻岩手県支部旧会報 自一号、至九号 平成二十一年十月三十日初版発行

平成二十四年八月十五日再版発行
復刻版発行の理由を、「はじめに」で宮本支部長が次のように

新年の集いは午後一時から四時。まず二日市文学館二階の豊島与志雄小説童話展示室を閲覧する。豊島与志雄は福岡県出身、太宰治が師事し、川端康成が兄事した文学者。生前の豊島の刊行書の九割を所持する唯一の展示室です。



筑紫野市「福岡二日市文学館」にて

引き続き、一階の会場に移動し、ビールで乾杯、二日市老舗「花源」の料理を食し、互いの近況報告に移る。少数

述べている。

「会報は、第九号をもって途絶えてしまった。このように続行するには随分苦勞していたようだが、内容、そのものは、支部の創成期に当たり、活動を何とか活発にしようという意欲を伴って、結構読み応えがある。また、それぞれの文章も朴訥ながら誠実であるし、加えて、これからの支部の在りようを考える時にはいろいろとヒントが与えられそうである。おそらく松苓会に係わりのある人なら、読んで感興をもよおすだろうと思われた。

興味をもつて読みたいと思っても、今では手に入れることはむずかしいだろう。これが、これを覆刻して残そうと思いついた理由である。（一部抜粋）」

- 第一号 「松苓いわて」昭和五十二年八月五日
- 第二号 「岩手支部松苓會會報」昭和五十三年十月三十一日
- 第三号 「松苓いわて」昭和五十五年九月二十日
- 第四号 「二松學舎松苓会岩手縣支部報」平成元年六月二十日
- 第五・六号 「二松學舎松苓会岩手縣支部報」平成三年三月三十日
- 第七号 「二松學舎松苓会岩手縣支部報」平成四年七月三十一日
- 第八号 「二松學舎松苓会岩手縣

支部報」平成六年七月三十一日
第九号 「二松學舎松苓会岩手縣支部報」平成七年七月三十一日
岩手県支部会報 東日本大震災関連号保存版 平成二十五年十二月一日発行

- 一 覚書き 東日本大震災のこゝと〈抜粋〉
- 二 東日本大震災罹災者の皆さんに御支援を
- 三 東日本大震災松苓会岩手県支部会員・安否報告
- 四 東日本大震災松苓会岩手県支部会員・安否最終確認
- 五 松苓会岩手県支部会員からの近況報告Ⅰ
- 六 二〇一一・三・一一 あの時のこと
- 七 松苓会岩手県支部会員からの近況報告Ⅱ
- 八 「かわいキャンブ」に被災地支援活動の皆さんを訪ねて
夕食づくりと交流
九 八木澤商店取締役会長・河野和義氏
「東日本大震災から一年がたつて」を聴く

長野県支部

◆支部報発行

長野県支部報 第二十四号 平成二十五年六月二十七日発行
・陽明学は知行合一 支部長 関

- 保典（三十五回）
- ・講演 学校法人二松學舎理事長 水戸英則
- ・諏訪湖周辺を巡って
（平林たい子記念館・赤彦記念館・今井邦子文学館ほか）
- ・平成二十五年文学散歩 善光寺周辺を巡って

平成25年度 秀葉会（第38回卒同期会）総会・懇親会

平成25年度秀葉会の総会・懇親会が、大学祭（創縁会）、ホームカミングデーにあわせて、11月2日（土）17時から、『北海道』（飯田橋駅前店）に於いて、14名の参加により、開催されました。

総会では、議題として、①会則の一部改正について ②卒業45年、50年に向けた事業について

③その他が審議されました。次いで懇親会に移り、沖繩から参加の金城健一さんの乾杯に始まり、参加者の近況報告、学生時代の思い出等で、会の3時間が瞬く間に過ぎま



ホームカミングデーに参加した38回生

進学相談会 平成二十四年度
会計報告

- ・長野県支部総会のお知らせ
平成二十四年度長野県出身卒業生
平成二十四年度業種別就職一覧
平成二十五年度入学試験結果
平成二十五年度都道府県別志願者・入学者数 他

した。今回の話題は、平成26年12月に竣工を目指す新校舎、九段4号館（仮称）についてでした。最後に、コールエコース出身の東一雄さんの指揮により、全員で校歌を斉唱し、来年の再会を約して終了しました。当日の参加者は次の通りです。（敬称略）

東一雄・石塚法子・市川友子・金城健一・金子廣志・越川幸代・小林公雄・小林憲二・酒井淳吉・田原迫俊朗・永井陵次・廣田克己・松浦紀子・吉岡富子
ホームカミングデーのみの参加者
生垣しげ子・上田幸子・金尾妙子・小杉絹代
ホームカミングデーにパンフレットを提供。
たつみ寛洋ホテル（象潟温泉）
佐藤寛
尚、平成26年度は、大学卒業後45年を迎えることになり、多くの会員の皆様の参加をお願いしたい。

「日本ファンタジーノベル大賞」

古谷田奈月さん（文学部72回卒）

「日本ファンタジーノベル大賞」を受賞した古谷田奈月さん（文学部72回卒）について紹介します。「日本ファンタジーノベル大賞」は読売新聞社東京本社と清水建設が主催し、新潮社が後援する文学賞で、大人も楽しめる新しいファンタジー文学の開拓と確立、そして力量ある新人作家の発掘と育成を目的に1989年に創設され、この25年間に酒見賢一、鈴木光司、畠中恵、仁木英之などの個性豊かな作家を輩出しています。選考委員からもこれからの人という評価がされており、今後の飛躍が期待されます。二松學舎大学入学の動機は将来の執筆生活を意識して、日本文学を学ぶためということでした。同窓生として誇らしく、心から祝福して今後のご活躍を祈りたいと思います。

なお、「日本ファンタジーノベル大賞」は来年度から休止とのことでした。

「第25回日本ファンタジーノベル大賞」の授賞式が平成25年12月2日に開催されました。

授賞式前の本学広報課のインタビューには「物心ついた頃からものを書く仕事に就くことを考え、日本文学を学びたいと本学への進学を決めた」と答えています。卒業後もアル

バイトなどを続けながら書き続けてきたとのことでした。ものを書くという将来を見据え、そのために学び、卒業後も書き続けてきた強い意志と生き方は授賞式のスピーチにも感じられます。インタビューは、古谷田さんはとてもきれいな方で、終始にこやかな表情の優しいオーラに包ま

れていたと言います。ものを書くということこそ「ここが私の戦う場所」と言い切る力強さを持ち合わせた魅力的な人とその印象を語っています。ひたむきに夢を追い続ける同窓生に熱い声援を送り、大きく羽ばたくよう、できる応援をしましょう。

なお、受賞作の『今年の贈り物』は『星の民のクリスマス』と改題され、平成25年11月22日に新潮社から発売さ



れています。発売に際して作品は次のように紹介されています。

「つらい時、いつも傍らにあった物語。もし、本当にその中で暮らせるなら」。

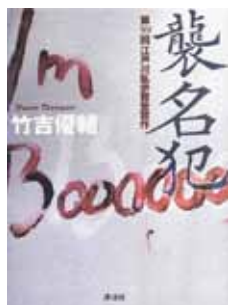
クリスマスイブの夜、最愛の娘が家出した。どこに？ 六年前父親が贈った童話の中に。娘を探すため、父は小説世界へと入り込む。しかしそこは、自らが作り上げた世界と何かが決定的に違っていた。人はどうして物語を読むのだろうか？ その答えがほんの少し見えてくる、残酷で愛に満ちたファンタスティックな冒険譚。」

『襲名犯』 公開読書会開催！

江戸川乱

歩賞を受賞した竹吉優輔さん（文学部七十二回卒）を迎え、著書の

『襲名犯』公開読書会が、三月二十九日に本学で開催されます。



『襲名犯』公開読書会 ゲスト／竹吉優輔氏

3月29日（土） 15時～17時

702教室



二松學舎大学文学部近代文学ゼミナール②は、本学出身の作家竹吉優輔氏をお招きし、公開読書会を行います。テキストは、第59回江戸川乱歩賞受賞作『襲名犯』（講談社）および受賞作『イーストウッドは助けにこない』（江戸川乱歩賞受賞アンソロジー『ブット・オブ・ア・ワイルド』（講談社所収）です。竹吉氏にこれまでの歩みや創作における思いをうかがいつつ、作品について自由に意見を交差する集いです。参加費はなく、事前予約も不要です。ミステリーが好きな方、作家になりたいと思っている方を始めとして、興味のある方はぜひ参加してください。

日 時：2014年3月29日（土）15:00～17:00
ゲスト：竹吉優輔氏
会 場：丸の内キャンパス1号館702教室
テキスト：『襲名犯』（講談社）
『イーストウッドは助けにこない』
『ブット・オブ・ア・ワイルド』（講談社所収）
※テキストは各自でご用意ください。どちらか一方でも結構です。
問い合わせ先：yusuke@koushoku.ac.jp
(山口直孝)



卒業生の紹介



文学部国文学科卒業
加藤 達哉 (78回)
警視庁久松警察署

私は、大学時代に軟式野球部に所属していました。平日に公式戦があり、教員資格の取得も目指していたので、授業と部活を両立させるのは、とても大変でした。しかし、部活や学校生活を通じて人間関係、社会人になるための準備やマナーを教えていただき、そこで得た経験が様々な場面で大変役に立ちました。また、4年生になると就職活動や卒業に向け

てキャリアアセンターへ連日足を運び、相談や企業説明会などの紹介をしていただきました。私は、卒業後、郵便事業株式会社に入社しました。そして茨城県のひたちなか支店に配属され、2年間、バイクで郵便物の配達を行ないました。初めての土地でありましたが、道順やお客様の顔、部屋などを全て記憶しました。夏の暑さ、冬の寒さ、雨の日や雪の日など大変な日もありましたが、配達の時はとても感謝され、それなりの充実感がありました。しかし、もっと人の役に立つ仕事をしたいという思いが募り、警視庁警察官を目指し、仕事後に勉強を重ね、採用試験に合格

することが出来ました。入庁後は、警察学校で警察官になるための厳しい訓練や教養を半年間受けましたが、親身となって指導してくれた教官や助教、一緒に励まし合った同期生との絆は、私の宝となっています。現在、私は、水天宮や明治座を管轄する久松警察署に配属となり、交番勤務員として日々悪戦苦闘しています。警察の仕事は、社会のあらゆることに関連しており、覚えることが沢山ありますが、これからも、二松學舎大学の卒業生としての誇りと自信を胸に秘め、都民の安全・安心のために全力で邁進したいと思っています。



国際政治経済学部国際政治経済学科卒業
富樫 さゆり (政経19回)
二松學舎大学附属高等学校

昨年の春に二松學舎大学を卒業し、現在は二松學舎大学附属高等学校の事務室に勤務しています。大学を卒業してからの1年はあつという間で、卒業式に袴姿で友人たちと写真を撮り合ったことが、まだほんの少し前のことのように感じます。私は高校生の時にお世話になった先生が二松學舎出身で、その先生の話す都心での生活や、学生時代の話に憧れを

抱き、二松學舎大学に入学しました。入学当初は初めてのことがばかりで何もわからず、大学の事務の方に学校の近くの医者場所を教えてもらうなど、とてもお世話になった思い出があります。3年からは田端克至先生のゼミに所属し、国際経済を学んでいました。ゼミの仲間達とはフェイスブックを使って課題の情報を交換し、プログラムを組んで経済情勢の計測にチャレンジするなど、新しく便利な物は取り入れながら課題を進めました。新しく取り入れたものに着いていけず、戸惑うこともありましたが、ゼミの仲間達からアドバイスをもらうなどして、大変ながら

も充実した毎日を送ることができました。私の学生生活は、人との出会いと支えがあったからこそ充実していたものだと思っています。そのため、将来を考えたときに、今度は私が人を支え、将来をサポートしていく仕事がしたいと考えるようになりました。そして、現在は附属高等学校の事務室に勤務し、奨学金の申し込み手続きなどを行っています。自分の高校時代や、私自身の学生生活がとても楽しく充実したものであったため、高校生の皆さんにも楽しい学校生活を送り、将来につなげていきたいと思っています。

卒業生の活躍



左から上田さん・榎本さん・星さん・宮本さん（国立能楽堂 楽屋にて）

伝統を今に伝える能楽師として活躍する卒業生

二松學舎大学には、平成二十七年に創立五十周年を迎える二松學舎大学狂言研究会があります。本学の卒業生である狂言大藏流の現宗家が設立し、同じく卒業生である大藏吉次郎師（40回卒）が設立時代から熱心な指導をして下さるクラブです。毎年、狂言研究会では、国立能楽堂研修舞台で、本物の装束を着て演じる本格的な狂言公演『自演会』を行っています。その舞台は、現役の学生から様々な世代の卒業生までが参加しており、本学に関わる卒業生や学生、保護者の方々のみならず、あ

卒業生がさまざまな分野で活躍しています。ここでは卒業生である松苓会員の活躍ぶりの一端を紹介していきます。

るきっかけからお越しくださり、ずっと楽しみに通ってくださる根強いお客様もいらっしゃるそうです。また、舞台には参加しなくても、当日に元気なお顔を見せてくださるOB・OGで楽屋もより華やかになります。

現在、二松學舎大学文学部国文学科では、文学に深くかわかる伝統芸能を、学生が実際に体感し、そこから日本文化の真髄や、心を学ぶ講義として大藏吉次郎師の「狂言」をはじめ「能」の授業が学生たちに人気となっています。

この大藏吉次郎師のもと、本学の卒業生で狂言研究会OBの、宮本昇さん（59回卒）、星廣介さん（61回卒）、榎本元さん（63回卒）の三人がプロとして、上田圭輔さん（78回卒）がプロ見習いとして活躍しています。

宮本昇さんは、平成七年『那須』。同十二年『三番』。同十六年には、能楽師の登竜門とされる大曲『釣狐』を披いており、その誠実で清々しい演技にファンが多く、数多く

の舞台で活躍されています。また、能楽界でも将来を期待されている一人です。

星廣介さんは飄々としたあたたかみのある雰囲気好評です。

榎本元さんは、平成二十一年に『三番三』を披きました。その爽やかな芸がとても人気です。

上田圭輔さんは、今年入門四年目を迎える一番の若手です。現在、一

斎須博（文五十七回卒）さんが平成二十五年十二月一日の読売新聞茨城版の「常陸人」に、アマチュア落語家として紹介されました。今後の活躍も期待されます。

常陸人

11月16日、日立市の大久保小学校体育館に集まった児童やその保護者を前に、特設の高座で古風落語「転失気」を披露した。高く通った声でテンポ良く言葉を発し、観客をぐっと引き込む。おもしろいフレーズや話方に小学生が噴き出す。すかさず「まだそんなふうに笑うことは言っていないんでしょ」と応じ、会場を爆笑に巻き込んだ。

斎須 博さん 46
（二松学舎大学文学部国文学科）
茨城キリスト教学園高教諭



日本一のアマ落語家

から声がかかった。出演予定だった演者の代役上がった。高座がおもしろい。評判になり、口コミで広がった。アマチュア落語家は、高座に上がる以上は「より良いもの」にしようと思っている。江戸時代から落語は、いつの時代も子供から大人までが楽しめる普遍的な笑いがあって、語り手によって、面白かったりつまらなかったりする。水戸市の自宅から動

が好きなところもあり、二松学舎大学文学部国文学科へ入学をきっかけに「お話しやべりに専念しよう」と落語研究会（落研）に入った。落研は上下関係が重なる雰囲気。先輩の教えが全て。布団に正座して稽古を繰り返す。落研で学べる落語を完壁に覚えた。

「落研と教員生活は別。よく聞かれるが、関連性はあまりないんです。落研は、高座は、教師の立場で話している。大蔵吉次郎師が現役の場、大好きな落語が表のおかきで、仕事にも力が入る。落研は、生徒のことで頭がいっぱい。『今はセンター試験でいい点数を取ってほしいですね』。その目は弟子を思う師匠のようだった。（小池勇喜）

「上毛かるた」と浦野匡彦 ―群馬文化協会が県に無償譲渡

松苓会常任幹事・群馬県支部長の
新井喜義氏(37回卒) から、『朝日ぐ
んま』紙(朝日新聞姉妹紙 201
3年11月22日号)が、1月開催の常
任幹事会で配布された。郷土の先輩・
浦野匡彦理事長・学長が、誕生に
かかわった『上毛かるた』。そのかる
たを守り続けてきた財団法人「群馬
文化協会」(初代理事長は浦野匡彦。
現理事長西片恭子氏 浦野氏長女)
が、商標権や著作権などを群馬県に
無償譲渡されたという記事。「上毛か
るた」生みの親である浦野匡彦は、二
松學舎専門学校第2回卒(昭和7年
3月)。

「伊香保温泉日本の名湯」「心の燈
台内村鑑三」「つる舞う形の群馬県」
「裾野は遠し赤城山」など群馬県の名
勝史蹟、歴史的人物などが詠まれて
いる。

専門学校卒業後、国費による北京
大学への留学、満州国官吏を経て帰国
した浦野氏は、結成間もない恩賜財団
同僚援護会群馬支部の常任幹事に就
任。戦火で荒廃した郷土を目の当たり
にして、「夢を失った子どもたちに明
るく楽しく希望の持てるものを作ろ
う」と、郷土の名勝旧蹟や歴史的人物
を紹介、愛郷心の発揚を目的に、昭和
22年に制作された。

『朝日ぐんま』紙では、「上毛かる
た」制作に至る経緯から、現在にいた
る「上毛かるた」の歩みを記している。
なお、「群馬文化協会」理事長の西
片恭子氏には、2002年6月刊行
の『上毛かるたのこころ―浦野匡彦
の半生』(中央公論事業出版)がある。

第63回書道學會展

文部科学大臣賞受賞!!

小島 規子(57回卒)

(旧姓 石井)

九段下の駅から地上に出て、武道館
の入り口の「書初展」の文字を目にす
ると、重たい書道道具を持つて大学ま
で向かったことを懐かしく思い出し
ます。二松學舎大学在学中は陶淵明
の研究を行う傍ら、書道を専攻し、書
道部にも所属しておりました。大学の
書道科には多くの先生がいらっしゃ
いましたので、流派を超えた書を学ぶ
ことができました。伝統書道を重んじ
る授業は基礎基本でしたが、永遠のテ
ーマでもありました。

卒業後、十数年経って子育てが落
ち着き、書道を再開しようと考えた
時は迷わず、在学時に名誉教授であ
った石橋犀水先生が設立された日本
書道教育学会にお世話になることに
しました。ここでも二松學舎大学時
代に教わった理念である「学」「藝」
「道」の精神を鍛えられました。現在、
本会の書道教室「神田書学院」にお
いてペン講師をしておりますが、実
用的な面もさることながら、芸術性
の奥深さも学べる「用美一体」の楽
しさを伝えていきたいと思っております。

そしてこの度、公益財団法人日本
書道教育学会主催の第六十三回書道
學會展に於いて、文部科学大臣賞を



受賞しました。作品は全紙二枚継ぎ
の大きさと、張即之の「李伯嘉墓誌
銘」千二百字の臨書です。定められ
た紙面に原帖の品致を表現するため
の、行数・字間・文字規格・罫線の
太さ・墨色などに試行錯誤を繰り返
しながらの制作となりました。

在学中に学んだ陶淵明の「飲酒」の
中に『稱心』ということばがありま
す。二十五年を迎えた大地ゼミナ
ール武子会の会報誌の名称でもありま
す。自分の心に嘘偽りなく自己の心
に稱った生き方をすることというこ
とですが、私の雅号「鳳治」の「治」に
も同じ意味があります。大学卒業後
もゼミ会を通じて、偉大な先輩方や
後輩たちの心に稱った生き方を見聞
きする度に大きな勇気を頂いていま
す。私も自分の号に恥じない生き方
をするべく身が引き締まります。

ここに改めてお世話になった二松
學舎大学に感謝すると共に、松苓会
のますますのご発展をお祈り申し上
げます。



『朝日ぐんま』紙
『上毛かるたのこころ―浦野匡彦の
半生』(西片恭子著)

学生の各賞受賞一覧（平成 25 年度）

大会名	受賞内容	氏名
第 98 回全国学生書教展	特別優秀賞	原 義治
第 98 回全国学生書教展	文部科学大臣奨励賞（大学の部）	武内 すず
第 42 回全書芸展	東京都知事賞	武内 すず
第 98 回全国学生書教展	文部科学大臣奨励賞（一般の部）	佐藤 優弘
第 98 回全国学生書教展	中国大使館賞	真家 朋華
第 98 回全国学生書教展	審査委員長賞	竹下 友崇
第 98 回全国学生書教展	審査委員長賞	倉持 実季
第 98 回全国学生書教展	審査委員長賞	長谷 晏里
第 18 回全日本高校・大学生書道展	全日本高校・大学生書道展賞	長谷 晏里
第 18 回全日本高校・大学生書道展	全日本高校・大学生書道展賞	田村 里奈
第 42 回全書芸展	秀逸	田村 里奈
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	東京都教育委員会賞	泉水 咲穂
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	秋葉四郎選者賞	尾竹 結喜
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	吉田 直生
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	安藤 武礼
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	高嶋 美咲
第 7 回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	深沢美早季
第 57 回千葉県短歌大会（学生の部）	天賞	中島 萌
第 57 回千葉県短歌大会（学生の部）	地賞	松井 秀之
第 57 回千葉県短歌大会（学生の部）	優良賞	新藤 果林
第 65 回毎日書道展	漢字部Ⅰ類入選	大野 純奈
第 65 回毎日書道展	漢字部Ⅱ類入選	伊藤 華子
第 30 回読売書法展	入選	沖田 真耶
第 30 回読売書法展	入選	駒形 優香
第 30 回読売書法展	入選	櫻井 美緒
第 30 回読売書法展	入選	藤松 理恵
第 30 回読売書法展	入選	松澤 柚香
第 30 回読売書法展	入選	山田 優果
第 42 回全書芸展	秀逸	中川 清楓
第 42 回全書芸展	秀逸	奥平 真惟
第 42 回全書芸展	優作	藤木 実樹
第 42 回全書芸展	入選	荒木 義司
第 42 回全書芸展	入選	酒井 麻衣
第 42 回全書芸展	入選	内田 智也

○団体

大会名	受賞内容	団体名
第 98 回全国学生書教展	団体優秀賞	書道部

活躍する学生諸君

学生生活において「何か」に情熱をそそぎ、その思い出が今もなお鮮明に蘇る方は沢山おられることと思います。

本号では、現役学生諸君の様々な

分野での活躍をお伝えします。掲載の表は、本学学生が本年度受賞した賞の一部です。受賞の多くが書道展ということは、本学の面目躍如、まさに「お家芸」といったところでしょう。学生諸君の日々墨に塗れながらの真剣な創作活動を垣間見ますと、各書道展での高評価は納得の感があります。

短歌の分野での活躍も目を引きま

す。学生ならではの情熱と感性、そして文学を追求できる芳醇な環境が、

優秀な作品を生み出しているのでは、と推察します。

また、学部の学生のみならず、大学院生でも優秀な研究によって、高額な研究費を贈呈されたとの報告もあります。

例年ですと、剣道・跆拳道やスキーなど武道・スポーツ系での受賞も報告されていますが、現時点ではまだ無いようです。次年度の活躍に期待したいと思います。

平成二十六年度 地方大学説明会開催日程

開催都市名	開催予定日	会 場
岩手県・盛岡市	平成 26 年 6 月 21 日（土）	ホテル東日本
福岡県・福岡市	平成 26 年 6 月 21 日（土）	西鉄グランドホテル
長野県・長野市	平成 26 年 6 月 28 日（土）	ホテルサンルート長野
高知県・高知市	平成 26 年 6 月 28 日（土）	高知サンライズホテル
長野県・松本市	平成 26 年 7 月 19 日（土）	松本東急イン
愛知県・名古屋市	平成 26 年 7 月 26 日（土）	名古屋栄東急イン
広島県・広島市	平成 26 年 7 月 26 日（土）	広島グランドインテリジェントホテル

※説明会は、午後には実施されます。日程・会場等は予定ですので変更や中止の場合もあります。詳細は、松苓会本部までお問い合わせください。

二松學舎大学の平成二十六年度地方説明会の開催日程（予定）が決定しました。この説明会には、大学から学長をはじめ関係者が出席し、大学の現況等の説明も行われます。

開催案内は、開催道府県の高校を対象に送付されますが、同窓生にとっても母校の最新の情報を知るよい機会となります。大学関係者との懇談や支部会員相互の交流の場とすることもできますので、奮ってご参加ください。

松苓会の歩み(2)

前号発行後に古書店から昭和15年7月現在の『松苓会会員名簿』を入手した。今回は最初に、今回入手した昭和15年版の会員名簿をもとに当時の松苓会の様子を探り、続いて昭和18年4月から専門学校校長となる那智佐伝第2代会長の『松苓』に題する辞」を、そして学徒出陣にも触れたい。

昭和15年の『松苓会会員名簿』

本紙前号に写真掲載の昭和17年7月の『松苓会会員名簿 報国団員名簿』の編集後記に「名簿を出すようになってから4年目になりま



昭和15年7月現在松苓会会員名簿

す・・・」とあることから、昭和13年ごろから、機関誌『松苓』のほかに名簿を単独に発行したものと思われる。機関誌『松苓』では、現在のところ、第4号(昭和10年6月20日発行)までは会員名簿を掲載していることが確認できる。

今回入手の『昭和15年7月現在松苓会会員名簿』は、タテ11cmヨコ15cm全64頁からなり、専門学校在校生の組織である「松友会会員名簿」を併載している。奥付には発行日(昭和15年7月3日)、編集兼発行者として「二松學舎専門学校松苓会右代表 石川梅次郎」の名前が記載されている。

目次は、次のとおり。

索引(正会員、物故会員)、会則、松苓会役員(会長、副会長、顧問、幹事、委員)、賛助会員、正会員、転居・転職・改姓届用紙

会則は、昭和14年5月修正のもので、昭和6年3月定案、昭和7年6月修正、昭和14年5月修正の記載があり、改正の経緯がわかる。昭和7年修正会則と照らし合わせてみると条文の整備が数か所で行われているが、大きく変更になっているところは、第13条会費が、昭和7年「会費八年額金五拾銭トシ卒業ノ際ニケ年

分以上納入スベシ其ノ現金ハ母校会計係ニ取扱ヲ託ス」が昭和14年「会費ハ金六円トシ全額ヲ納入シタルモノハ終身会員トス其ノ現金ハ母校会計係ニ取扱ヲ託ス(但シ納入方法ハ母校卒業年度ニ於テ全額ヲ月賦前納スルモノトス)」となっており、終身会費制度を設けている。

当時の松苓会役員は、会長 山田準、副会長 那智佐伝。顧問に国分三亥、佐倉孫三、小豆澤英男、橋純一、今 欣吾の名前がみえる。

賛助会員には、現職の教職員の名前が掲載されている。

正会員として第1回(昭和6年卒)から第10回(昭和14年卒)までが掲載されている。巻末の編集後記に「卒業生の累計は七百二十九名です。(内死亡四十三名)」とある。「名簿係七・卒 大堀」とあり、委員で幹事の大堀恒之氏が編集等を担当されたことがわかる。

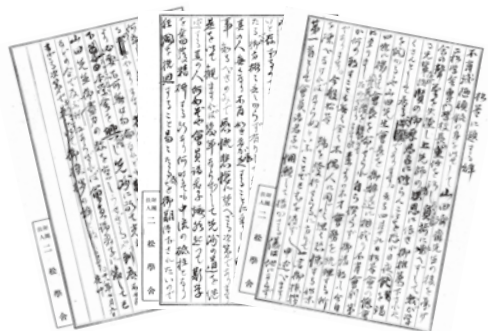
第2代会長 那智佐伝

専門学校初代校長の山田準先生が、昭和18年3月を以て校長を辞任され郷里の岡山県に帰られる。その後を継いだのが那智佐伝先生である。この間の事情は、『二松學舎百年史』に詳しくでている。会則により松苓会2代会長に那智先生が就任した。

松苓に題する辞

那智 佐伝

不肖浅陋頑鈍の身を以てして山田済斎先生の後を承け二松學舎専門学校長の重任を汚したる処負荷に任へずして我が學舎の聲譽を失墜し上先師の鴻恩に倍き御推薦下されたる先輩及び諸賢の御思召に悖らんことを恐れ日夜驚鈍を竭くさんとして居る状態であります。去る四月二九日松苓会の総会を開かるるや山田先生会長を御辞退に相成り不肖会則第四条に拠りて亦た其の後を襲うて会長を命ぜられ自ら揆らず御請致し今日に至りましたのでありますが素よりの不才会務を統理する所か何の致すことも無く全く木偶人に同じく深く恐悚する始末であります。今



那智先生の「松苓に題する辞」原稿



山田準校長辞任帰郷送別会（昭和18年3月）前列左から3人目国分理事長、4人目山田準校長、5人目那智左伝次期校長（『二松學舎百十年史』より）

般松苓^{（注）}号を発行せらるるに方りて御挨拶を陳べなければならぬといふことで已むを得ず一言申述べます。第一首として会員諸君子に頼願して措かざる儀は他にあらず第六条に明示される通り本校事業の得失に關し御遠慮なく御意見を具陳されんことを切望致します。頑陋の至りなれども諸君の御高見を容るる点だけは決して吝ならずと信じますから当局者と謀り出来得る事ならば必ず之を実行致し度いと存するのであります。次に先師高足の弟子本校に主席たるべき御方彬々乏しからず有りしが如今多くは物故凋落幾と其の人無くなり不肖如き者が承乏することに至りしは所謂時事知る

べきのみで感慨悲愴に禁へざる次第であります。是を以て觀ますれば幾年ならずして先師の道を継述する其の人何如ぞや会員諸君子蹶然起つて斯学を奮發精研する所あり何時にても中流の砥柱となり狂瀾を挽回すること易々たる底を御期待下されたいのであります。側に承れば山田先生の命名の後凋会あり己に業に国学なり漢学なり真に先師の後勁となり正誼明道を以て任せらるる御方之れあるべしと思ふが何卒して嶄然頭角を見はされんこと懇希に禁へざるのであります。茯苓となり世敝を医せらるる人材固より必要不可無は勿論なれども斯学第一人者として天下一ありて二なき本学舎を興隆し先師に於て光あるやう又山田先生御尽力の効を空しうせざるやう到底不肖などの企て及ぶ所にあらざれば会員諸君子に幾して已まざる次第であります。

（注）号数は空欄になつてゐる。

十八年七月九日 夜艸

この那智先生の題辭は、機関誌『松苓』第10号に掲載されたものと思われるが、第10号は大学に保存されておらず、掲載誌は見えていない。原稿から起したものである。

文中の「後凋会」とは、昭和16年9月に発会した二松學舎専門学校を資金面から後援する組織。

学徒出陣

昨年（平成25年）は、昭和18年10月21日、明治神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行会から70年。文部科学省からも各大学に出陣学徒に關する調査や資料収集が行われているかとの問い合わせがあったという。

昭和18年10月15日付の文部省体育局長から発せられた公文書「出陣学徒壮行会開催に關する件」が大学に残っている。壮行会要綱には、目的、主催、実施日時、参加範囲、服装、標識、隊の編成、式次第など15項目にわたつて詳細に記されている。二松學舎専門学校から何人参加されたかは記録がなく、不明である。

昭和18年10月21日に在籍していた生徒は、専門学校第16回生が1年生、第15回生が2年生である。3年生（第14回生）は、すでに繰り上げ卒業でその年の9月に学窓を後にしている。卒業後50年を経た卒業生の回想録として発行されている『茯苓』の第9号（平成19年8月1日発行）には、第13回卒から第20回までの卒業生の回想が収められている。戦時下での軍事教練、勤労動員や学徒出陣などに触れられているが、出陣学徒壮行会については、15回卒の岩本邦夫（前香川県支部長）の記録がある。

私達は勉強の傍ら、勤労奉仕にも参加いたしました。築地の砲台設置作業の手伝い、又横浜豊田自

動車工場での部品作り作業。そして、戦時体制は益々きびしく、私達学生も遂に戦場に行く事になり、昭和18年の暮、神宮外苑で盛大な出陣学徒の壮行会が行われ、その時私は校旗をもつて、先頭で行進をいたしました。終了後神宮を後に、歓呼の声に送られながら市内を行進し学校に、そして暮には夫々故郷に帰つて行つた。

同じく15回生で松苓会顧問の佐佐木鍾三郎（元理事長）は、松苓会報第7号（平成5年7月10日発行）に「学徒出陣から半世紀」と題して次のように記している。

さて、17年入学の第15回生が2年生の秋、各大学高専学生による、神宮競技場・井の頭公園往復35



昭和17年7月 北富士陸軍廠舎



出陣学徒壮行会の公文書

の武装競争があり、本学からも1組(10名)が参加したが、「従来この種の競技には参加しなかった二松學舎も今回は出場」と各新聞に報道された。

18年9月、第14回生の繰上げ卒業の後、東條内閣により文科系学生の徴兵猶予制度が廃止され、大正12年11月までのうまれの一、二年生は徴兵検査を受け、合格した者は、指定された各部隊に、12月1日、それぞれ入営した。

この直前に、学徒出陣壮行式というところで、東條英機首相の閣兵で神宮競技場で雨中の分列行進が実施され、残されていたフィルムは今もときどき映されるが、多く

の人が、出陣学徒全員が参加したと思込んでいる。そんなことがあるはずも無く、出席したのは一部の者にすぎない。

入隊のため学窓を離れる学生の中には、当時のことから「死んで帰ります」とか、「靖国神社でいましよう」と挨拶のことばを述べる者もいたが日頃温厚な二松學舎学長兼旧制専門学校長の先師惇齋那智佐典(よしのり)先生は極めて強い調子で、「そういうことを言うてはいけない。死なずに必ず生きて帰るなさい。」と言った。これにつられたように、配属将校の飯尾中佐も「いま陸軍の中には大陸で悪いことをしている連中もいるが諸君はその真似をしてはいけない。」と強調した。これらのことが学校の近くにあった憲兵隊の耳に入ったら、ただでは済まなかつたろう。母校はやはり真の中庸と自由を標榜する学校であつたのだ。

那智先生の訓示は、何人もの同期生が記している。

第16回生の萩昌弘は、『二松學舎百年史』に次のように記している。

私は、昭和十八年四月、二松學舎専門学校へ入学し、昭和二十年に卒業した。(中略)その年、初秋、突然、文科系学生への徴兵猶予が、停止された。朝刊でその文字を目にしたときの私(たち)の衝撃――率直にうちあけてしまえば、ああ、



入営送別会 如水舎にて 昭和18年10月

つきよくは明日発つ身であつた。(中略) 私たち一年生は、間もなく、教室の授業が全部閉鎖され、全員そのまま、赤羽にある日産化学の大工場へ、勤労働員という名で、労働者としての通勤をはじめた。

本学の卒業生ではないが、多田実元国際政治経済学部教授(定年後客員教授)は、平成5年8月、『何も語らなかつた青春―学徒出陣五十年、歴史を創ったわだつみの若者たち』(三笠書房)を著わしている。

小林公雄(38回)記

資料提供のお願い

二松學舎松苓会史編纂のための資料を収集しています。

特に次の資料をお持ちの方は、ご一報ください。

- ・機関誌『松苓』創刊号、第5号、第6号、第7号、第8号、第10号以降の号
- ・松苓会名簿 昭和13年以降昭和30年代までに発行されたもの
- ・松苓会会則資料

・松苓会活動(本部)に関する資料、支部活動に関する資料(支部報など)、同期会、クラブ等のOB会などの写真、専門学校時代、昭和20年、30年代の写真、卒業アルバムなど

松苓会支部長名簿

平成 26 年 3 月 1 日現在

支 部	氏 名	卒回
北海道	増井義昭	39
青森	目時捷三	37
岩手	宮本義孝	32
宮城	千葉仁	27
秋田	三浦基	41
山形	齋藤裕	38
福島	北村博	32
茨城	那花隼	36
栃木	寺内進	49
群馬	馬井喜義	37
埼玉	埼田哲夫	42
千葉	辻将一	45
東京	井上和男	42
神奈川	平野光治	40
山梨	板山俊介	36
長野	関保典	35
新潟	坂井福作	42
富山	小島貴雄	47
石川	菅野成也	50
福井	中道佳宏	58
岐阜	竹内秀人	55
静岡	永井秀陵	38
愛知	新海次守	30
三重	稲垣武嗣	33
滋賀	角井良暢	49
京都	廣田康男	54
大阪	浅田道徳	39
兵庫	武内一	47
奈良	武辻利隆	39
和歌山	明治章公	47
鳥取	小江角仁	38
島根	江山正敬	39
岡山	小平才二郎	26
広島	平岡賢嗣	40
山口	俵大倉明子	47
徳島	大西邦美	40
香川	大上田善達	38
愛媛	坂本淵生	37
高知	永吉淵一	36
福岡	佐吉黒瀬孝志	39
佐賀	長塩永英	38
熊本	熊本茂文	52
大分	大宮崎宣忍	36
宮崎	鹿児島正幸	41
沖縄	沖縄元昭一	31
	金城健一	38

松苓会役員名簿

平成 26 年 3 月 1 日現在

	氏名	卒回
顧問	佐古純一郎	11
〃	佐佐木鍾三郎	15
〃	雨海博洋	19
〃	末吉榮三	12
相談役	水戸英則	
〃	渡辺和則	
本部役員 (17 名) 事務局 (1 名)		
会長	神津賢一郎	27
副会長	大地武雄	院博 10
〃	廣田克己	38
幹事長	小林公雄	38
監事	椎木伸治	37
〃	磯水絵	41
常任幹事	千葉仁	27
〃	新井喜義	37
〃	手島茂樹	特
〃	小林憲二	38
〃	平野光治	40
〃	井上和男	42
〃	神河秀春	47
〃	高柳幸雄	49
〃	菅原義博	53
〃	高橋映子	53
〃	助川弘修	政 3
事務局	佐藤藤	41
幹事 (15 名)		
北海道	北海道	36
東北	山形	38
関東	茨城	36
近畿	兵庫	47
中国	山口	40
四国	香川	40
九州	大分	36
沖縄	大沖	38
	茨城	37
	千葉	42
	東京	49
	茨城	51
	千埼	59
	埼玉	59
	山崎	60
	崎花内	
	郁昭賢	
	紀裕隼	
	徳嗣美	
	忍一世	
	健哲幸	
	邦祐隆	
	明一士	
	孝徳	

生きる力がわく

「論語の授業」の紹介

二松學舎大学文学部の先生方が編集した、「生きる力がわく『論語の授業』」が、昨年十一月に朝日新聞出版から発行されました。定価は税抜きで千四百円です。「史上最強の指南書をやさしく読み解く」を副題に



寄贈図書

平成二十五年十月以降の寄贈図書は、次のとおりです。

●岡山古代地名探検 岡山城中岸元史明著

●国文学研究所 (二千円)

●枕草子年代研究二 岸元史明著

●国文学研究所 (三千円)

●唐代散文選 山田勝久著

●笠間書院 (千二百円)

●今日是一日、方丈記 磯水絵著

●新典社 (二千円)

し、論語を現代に生かす人生の道しるべとして、ぜひ一読ください。

寄付者芳名

平成二十五年九月一日から平成二十六年二月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。(敬称略) ご協力に心より感謝し、厚く御礼申し上げます。(二口 千円)

二十口 吉良 敦子 (文37)

十二口 寺岡 重満 (文32)

十口

岡野 英雄 (文32)

赤坂 文江 (文37)

松本 幹彦 (文37)

小林 公雄 (文38)

田原迫俊朗 (文38)

平野 光治 (文40)

佐藤 修 (文41)

笠原美智子 (文42)

妹尾 南平 (文42)

田川 ゆみ (文42)

高橋八重子 (文47)

奥澤 博行 (文57)

小野寺房枝 (文57)

笹崎 史子 (文57)

真鍋 透 (文57)

早川 剛 (政5)

終身会員手続きのお願い

松苓会の運営資金は、ほとんどが終身会員の会費で賄われています。平成14年度以降の卒業生は、卒業時に終身会員手続きを行っています。平成13年以前の卒業生は、終身会員手続きが必要です。平成13年度以前の卒業生の終身会費は一万円です。まだ終身会員手続きを済ませていない方は、ぜひ手続きをしていただきます。よろしくお願いいたします。

寄付金のお願い

従来、松苓会にご寄付をお願いしてきませんでした。新規の企画や事業を行うにあたっては、運営資金が必要となります。松苓会の事業推進と安定した発展のために金額の多少にかかわらず、一口1,000円で寄付金を募ります。ご協力よろしくをお願いいたします。

六口 本田 和成 (文42)

五口 目時 捷三 (文37)

持田 賢一 (文40)

中沼美智子 (文57)

二口 小山加代子 (文47)

鈴木 裕子 (文47)

一口 柳堀 節子 (文47)

山本 初恵 (文47)

原 友美 (文59)

榎澤 卓也 (文62)

寺坂 洋介 (文67)

表紙写真

本学1号館13階ラウンジは、レストランにもなっており、教職員、学生、近隣の会社員や主婦の方もよく利用しています。日本武道館や東京スカイツリーがよく見えます。千鳥ヶ淵の桜、新緑や紅葉の北の丸公園、冬の富士山や丸の内ビル群の夜景なども楽しめます。大学にお寄りの際はぜひご利用ください。

編集後記

本号は24頁というかつてない頁数に仕上がった。支部活動が活発になってきたことや大学の今や昔について伝えたいことが多いからだ。中でも85周年記念事業に向けて取り組んでいる「松苓会のあゆみ」は質量ともに力を傾けているものだ。しかし、長い歴史の中で散逸したり、埋れている資料も多く、まとめるのに苦労している。松苓会発足から早い時期の卒業生が減少しているため、資料が埋れている可能性が大きい。在学中に発行された資料や記録など往時をしのばせる資料を提供いただけないだろうか。

二松學舎
松苓会報
No.50

創刊 昭和62年12月1日
発行 平成26年3月17日
編集 二松學舎松苓会
住所 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話 03-3261-7408
振替口座 00180-5-160343 (郵便局払込取扱票)
印刷 協サンプライ

二松學舎大学(松苓会) www.nishogakusha-u.ac.jp
ホームページ
松苓会 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp